

1. はじめに

これまで、平城宮跡では内裏や大極殿、朝堂院といった宮殿部分の調査を中心に発掘調査を進めてきた。平城宮の役所については宮内省、大膳式、馬寮、造酒司などの調査があるが、二官八省といわれる律令制の役所のうち、その全体像が判明したのは兵部省が唯一のものである。これは1987年から進めてきた第2次朝堂院南方(壬生門内側)の調査のうち、その西方の役所の調査で明かとなった。その後、壬生門北方(第216次)、そして兵部省の成果をふまえて式部省西南部(第220次)と、順次東側へ調査を進めてきた。現在、さらにその約80m東側まで調査しており、今回の調査地は平城宮の東南隅に近い場所にある。

今回の調査では、調査区西半部で式部省の東南部の様相が判明し、さらに式部省の東方約10mのところ、今回の報告の中心となる新たな役所を発見した。ここではそれを式部省東役所と呼ぶ。調査は1991年4月1日から開始し、現在継続中である。発掘面積は約1600㎡である。

2. 見つかった主な遺構

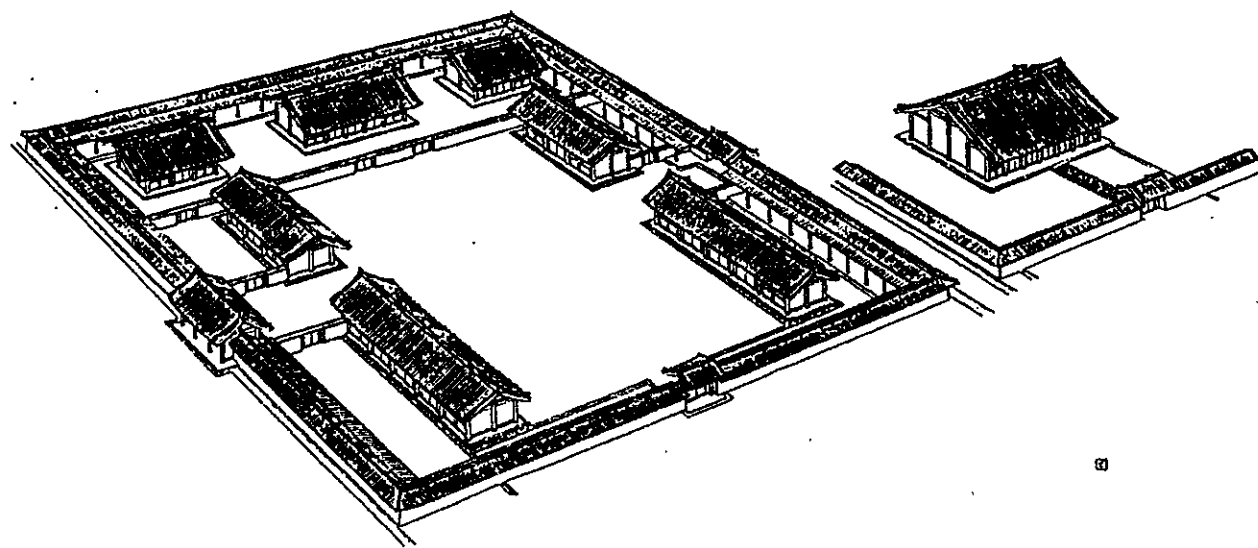
*式部省：第220次調査で見つかった建物と対称の位置にほぼ同じ規模のものがある。2時期に分かれる。

- ・礎石建物15：基壇の上に建つ南北約21m、東西約5.4mの瓦葺建物、後に東西に廂をつける。この廂は、今回の調査で明かとなったものである。
- ・東面築地：幅約1.5m、後半の時期には内側に廊(片廂の廊)がつく。

*式部省東役所：式部省東面築地から約10m東にある、築地塀に囲まれた役所で役所全体の規模は今のところ不明であるが、少なくとも東西50m以上ある。今回はその西南部を調査した。

- ・築地塀20：幅約1.8m、内側に石組の雨落溝がめぐり、西南隅と東で暗渠を通して、南面築地は式部省、兵部省の南面築地と揃う位置にあり、門が開く。
- ・門22：1間(幅約3m)の礎石建ちの棟門。雨落溝は門の内側で北へ張り出している。
- ・礎石建物21：東西約27mの基壇をもつ建物で、周囲に雨落溝がめぐり、南面中央に礎敷の歩道がとりつく。南北長は不明。礎石などの痕跡は見つからないが、桁行7間(東西21m)程度の建物が建つか。建物の正面に歩道がとりつく例は平城宮でも珍しい。
- ・礎敷歩道：門と礎石建物をつなぐ幅約3mの南北歩道で、拳大か、やや小さめの自然礎を蒲鉾状に敷き詰めている。
- ・鑄造炉：5基以上ある。直形20~30cmの小型の炉で、銅製品の鑄造に使ったもの。

今回の調査では今までのところ、この役所の名称などを具体的に示す文字資料などは、見つかっていない。しかし、今回の調査区に隣接する第155・32次調査で出土した木簡、墨書土器などの式部省関連の文字資料は、この役所あたりから捨てられた可能性が高く、この役所が式部省に関わりの深い役所であることが推定できる。特に32次調査(今回調査区の東および東南に接する)で出土した「式部外曹司進」と記された墨書土器は示唆に富む。また、平安宮の宮城図には、式部省の東に「式町」と記される一画があり、式部省附属の役所があることがわかる。このようなことから、今回、新たに発見した役所について、式部省の外にあって、式部省に附属する役所とする見方がひとつできる。しかし、礎石建物がりっぱであることや、それが平城宮内でも珍しい歩道のつく建物であること、また、礎石建物と築地塀の間の空き地を利用するようにして鑄造作業をしており、これが礎石建物をもつ役所の中にあつて異質な感じを与えていることなど、式部省の単なる附属施設とは一概には見なせない面もあり、なお問題が残されている。溝19や築地雨落溝など現在調査中の溝があり、そこからの文字資料の出土が期待される。今回は役所の一部分を調査したにすぎないが、今後、近鉄線路の北側を調査する予定であり、その時に式部省東役所の全体像が明かとなり、役所の性格も解明できるものと期待する。



式部省・式部省東役所推定復原図

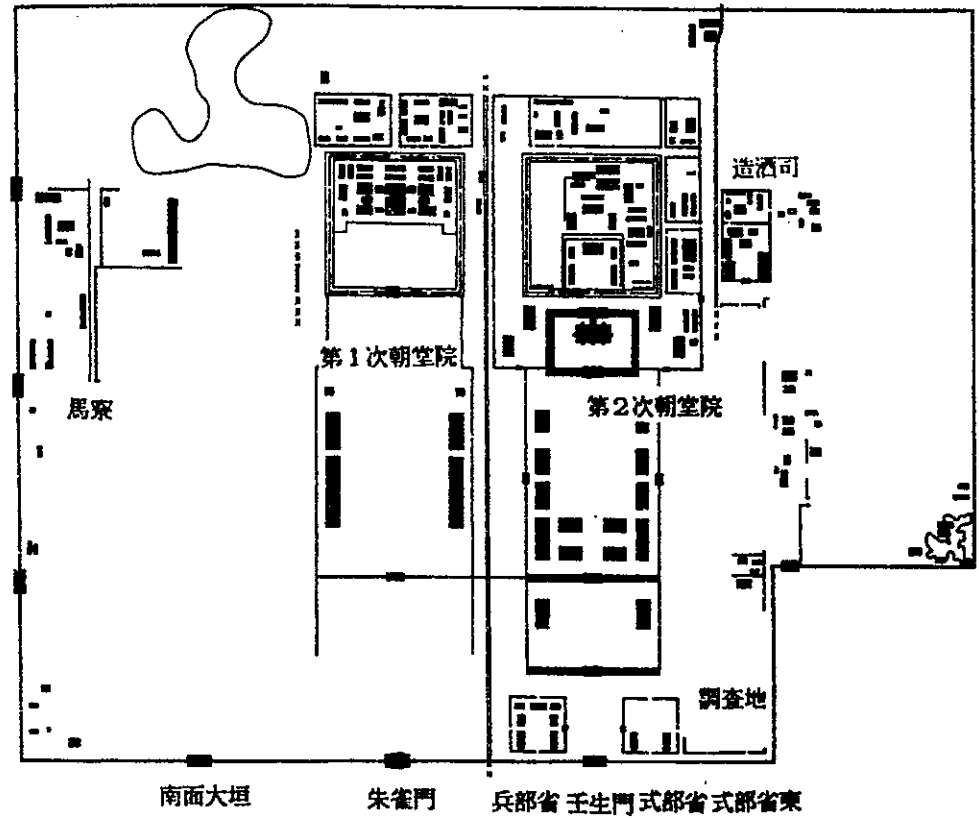


图1 平城宮全体図

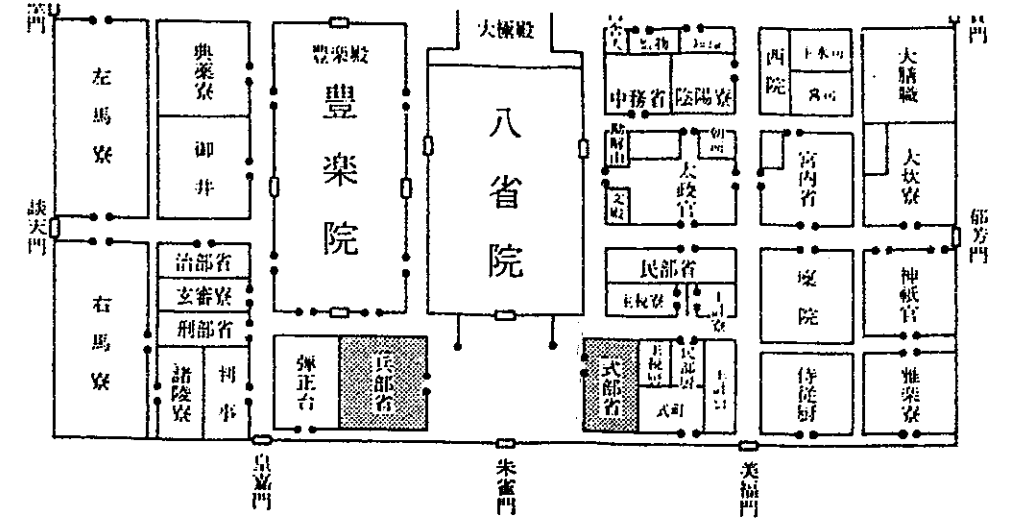


图2 平安宮宮城南辺部分 (陽明文庫本)

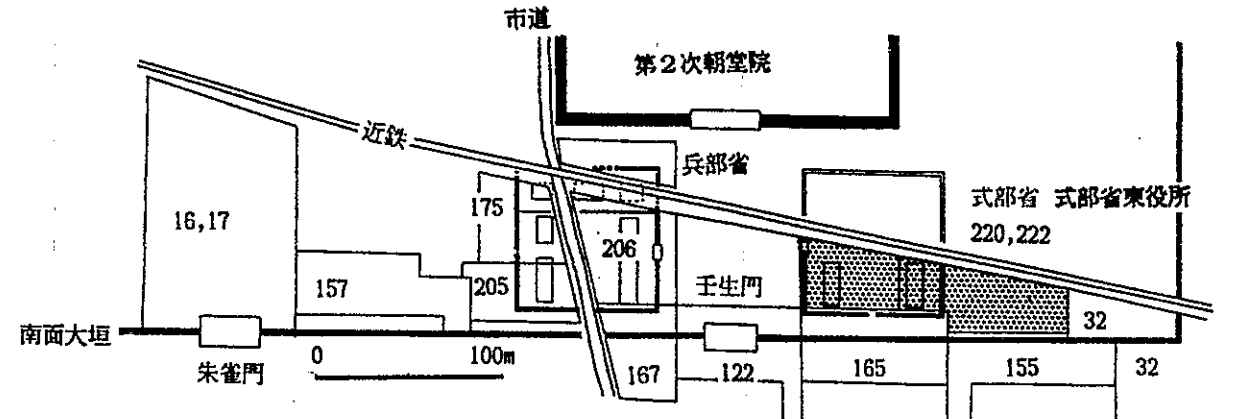


图3 壬生門付近のこれまでの調査

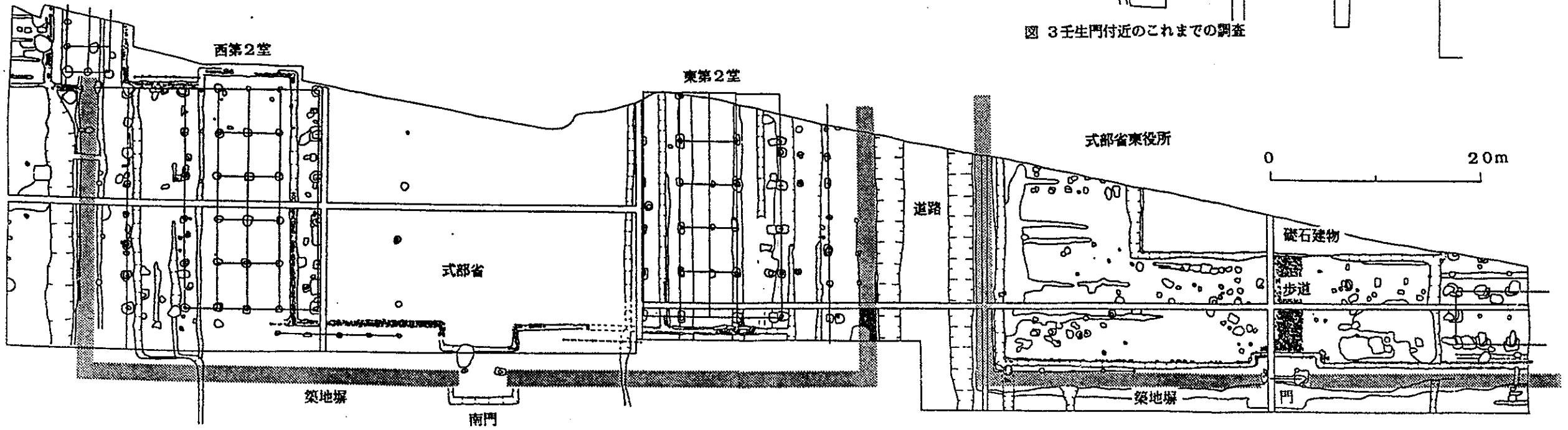


图4 第220・222次調査遺構全体図

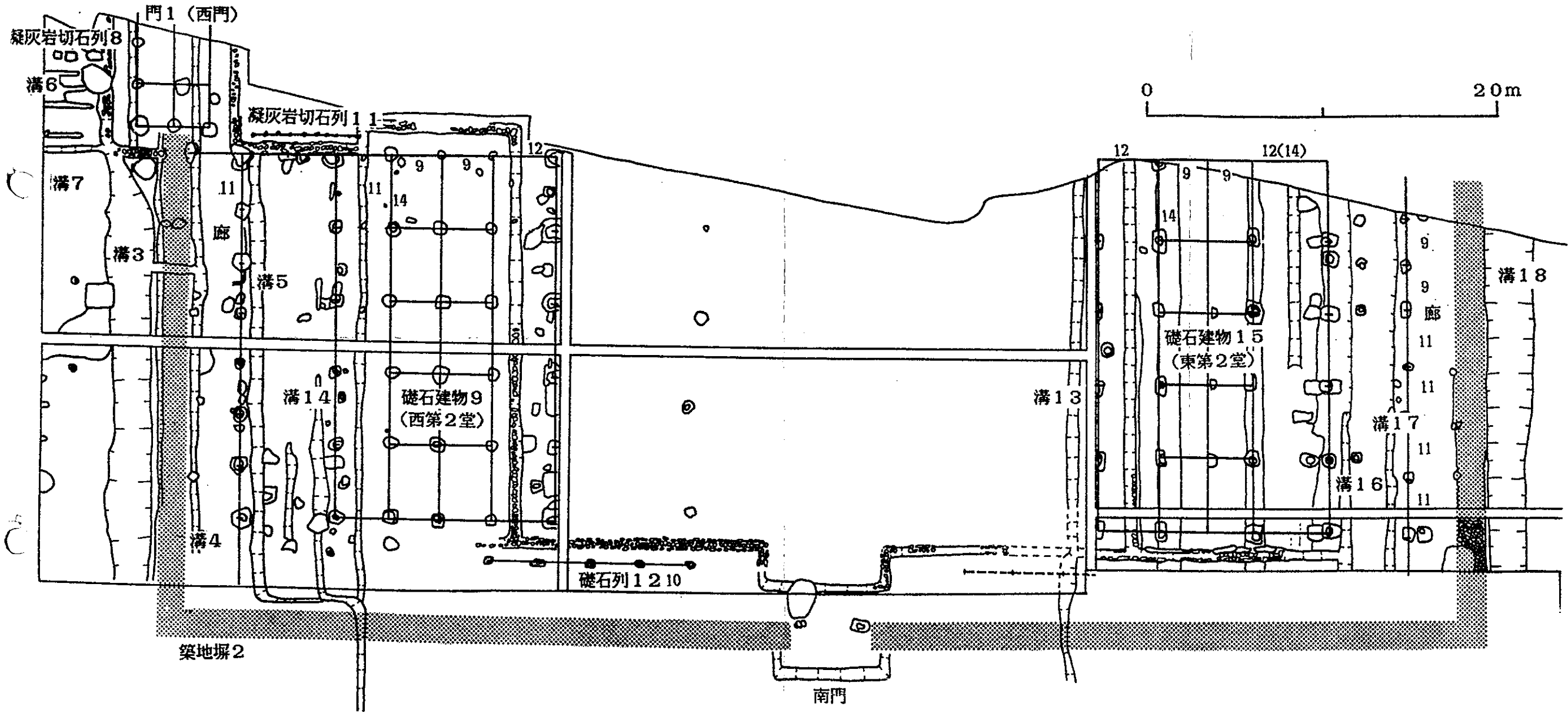


图5 式部省

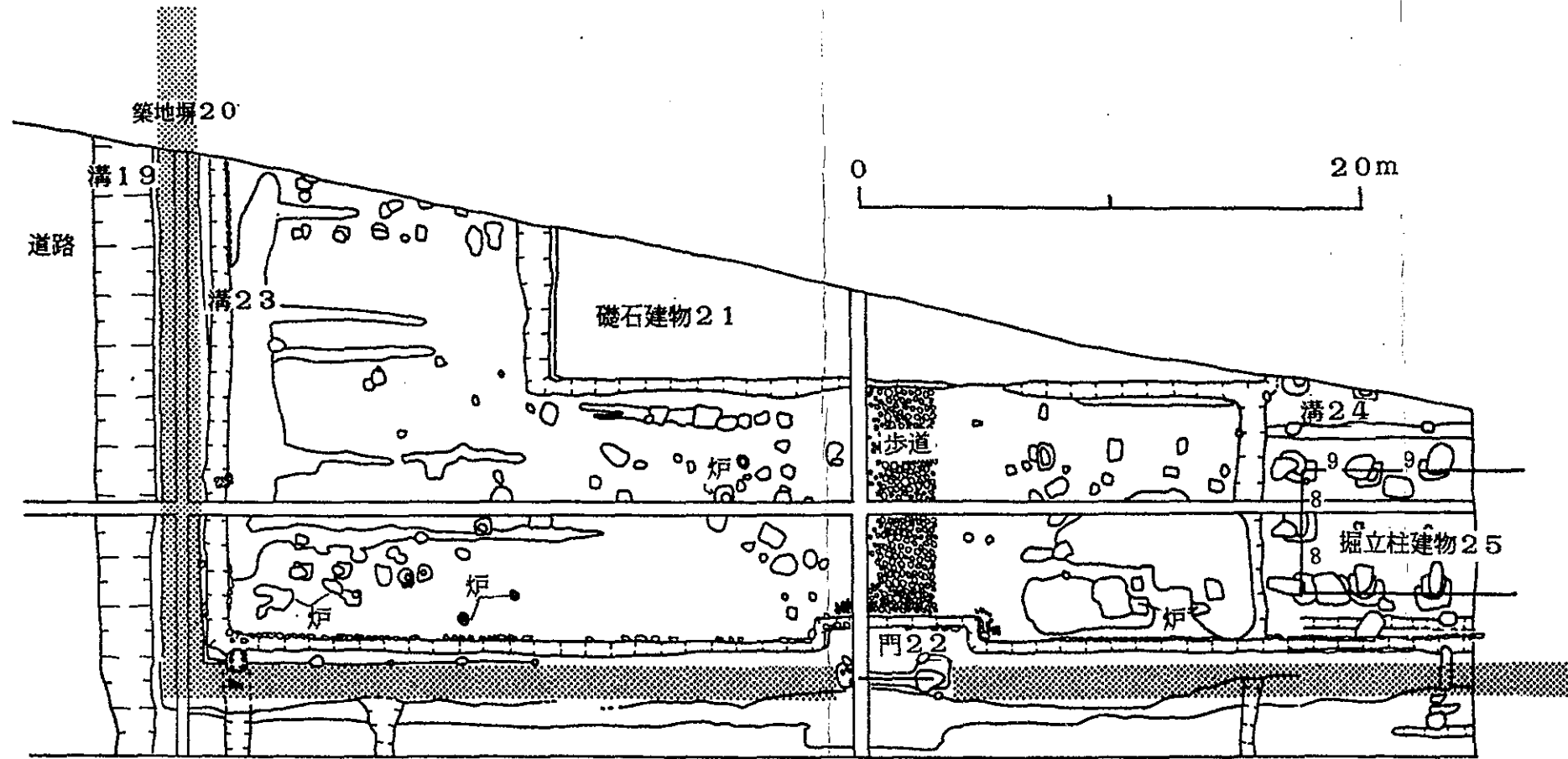


図6 式部省東役所